これは

“愛”

ではない

目次

ヒミツの関係 ……005

お砂糖を召し上がれ ……023

家賃は８万１千円。 ……039

『運命』……055

ヒミツの関係

ミリしか知らない
DOM/SUBユニバース

デルウハが研究所を訪れて数日、一部の研究員以外が寝静まった深夜のことだ。

所は、夜遅くにデルウハと話をする時間を設けることになった。日中にイペリットとの戦闘が発生し、デルウハに要求されていた周辺の地形図を渡しそびれてしまったせいだ。ハントレスとイペリットの戦闘は容易に地形を変えるが、それはそれとして資料を確認したいらしい。

机に地形図を広げて、おそらく戦闘で変形した箇所に赤を入れながら、何でもないようにデルウハは尋ねた。

「あんた、Dom だったりするのか？」

大体、組織の長に向いているような人間は Dom である。デルウハの推察通り、所も性質は弱いが Dom だった。

「ええ、はい。よくわかりますね。……デルウハ殿も Dom でしょう？」

所が見たデルウハの振舞いは、見るからに、圧倒的に、Dom のソレだった。支配的で、統率力が強く、躾が上手い。

ハントレスに言うことを聞かせるようにするための行為は、躾で済ますには暴力的過ぎるが、成果は上がっている。

だから、デルウハの返答は、所にとって予想外だった。いや、研究所の誰もが、そんなはずは無いというだろう。

「いや、俺は Sub だが」

「……嘘でしょう？」

「嘘をついて何の得がある」

一般的に、Sub は被支配的であり、従属的であるとされる。もちろん、程度には個人差がある。

それにしても、あまりにデルウハらしくなかった。

「誰かの言うことに諾々と従うデルウハ殿は、あまり想像ができなくて……」

「よく分かってるじゃないか」

ぎ、とデルウハが座っている椅子が軋んだ。背もたれに体重を預け、腕を組んで所を見るデルウハは、その緑の目を満足げに細めている。

「無意味な命令に従うのはごめんだが、面倒なことにある程度のプレイを熟さないと精神的安定から遠ざかる。ここ暫くは相手が居なくて欲求不満だったんだが……ちょうど良かった」

何が『ちょうど良い』のかは、会話の流れから明らかだった。デルウハの唇が弧を描く。

「そうだな……Come って言ってみてくれよ、所長？」

どう考えても、命令する側の口調である。

所は、熱に浮かされたように、そのコマンドを、オウム返しに繰り返した。

「か……かむ」

「もっとはっきり」

「Come」

「それでいい」と笑ったデルウハは、おもむろに立ち上がり、所が座るソファまでゆっくりと歩み寄った。膝を突いたソファの座面が沈み込む。デルウハの大きな手が、所の肩に触れた。

「で、ケアはどうした？」

「ええと、Good……？」

「身体接触を伴うべきだと学ばなかったか？」

言葉だけを口にした所に、デルウハは目を眇めた。

そして、少しだけ小首を傾げてみせる。

もちろん、所はDomとして、どのようにSubに接するべきかを知っていた。まだ下界に居た頃に、義務的に教えられていた。それをデルウハに対して実行することに心理的抵抗があるだけだ。

「所長？」

所の肩に置かれた手に力が籠った。

ぎしりと肉が軋んだ気がする。

「Good-」

ケアワードを繰り返して、デルウハが促したように、彼のピンクの髪を撫でた。逆立てられた髪は、見た目に反して柔らかく、さらりとしていた。

満足げに頷いたデルウハは、「次は？」と催促した。

見下ろしてくるデルウハの影が、所の顔に落ちる。次に発するべきコマンドなど、所に思いつくはずもない。

一番基礎的なKneel《跪け》を促さなかったということは、デルウハはそのコマンドを好まないのだろうと想像できるだけだ。

黙ったままの所の唇を、デルウハの親指が撫でた。

指先はよく手入れされている。短く切られた爪はやすりがかけられて、ささくれ一つない。

だから、僅かに引っかかりを感じたのは、所の唇が荒れているせいだ。

「あのぅ……」

眉を下げて呼びかけた所に、デルウハは舌打ちした。

「察しが悪いな」

「すいませ」

胸倉を掴まれて、反射的に出た謝罪の言葉を言い終える前に、所の口は塞がれた。きっかり一秒で解放された所に、まだ吐息がかかる距離で、デルウハは再び催促した。

「次に言うべきコマンドは分かっただろう？」

流石に、ここまでされて分かりませんとは言えない。

ごくりと生唾を飲んだ音が、いやに響いて聞こえた。

――これ以上は、取り返しがつかない。

そう思いながら、所には、デルウハの望みに従う以外の選択肢は無かった。

「……Kiss」

「良い子だ」

まるで立場が逆転したように、デルウハは所を褒めて、そして再び唇を重ねた。

体調管理という名目から逸脱して、触れた唇から性的な欲が湧き上がることを、所は、自覚した。

触れるだけに収まらない粘膜同士の接触は、嘘みたいに気持ちが良かった。